

渡辺美奈子 著
『ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品——「冬の旅」を中心に』

山下 剛

ヴィルヘルム・ミュラーと言えば、シューベルトの連作歌曲集《美しき水車小屋の娘》やとりわけ《冬の旅》の詩を作ったドイツ・ロマン派の詩人として知られているが、彼の生涯やその他の作品となると、肩をすくめるしかなかったのが現状ではなかろうか。シューベルトによる作曲によってミュラーの名前は後世に伝わってはいるが、詩人としては「二流どころ」というのが文学史における常識であった。ところが1994年の生誕200年を機に国際ヴィルヘルム・ミュラー協会が設立され、5巻本の全集が刊行されるなど、再評価の動きが活発化しているという。日本においても2004年に《冬の旅》を詩と音楽の両面から徹底的に分析した三宅幸夫氏の『菩提樹はさざめく』（春秋社）が出版され、2005年には南弘明・南道子両氏による『シューベルト作曲 歌曲集 冬の旅 対訳と分析』（国書刊行会）も世に出ている。両書とも1997年のシューベルト生誕200年も執筆の動機となったものと思われるが、いずれにもヴィルヘルム・ミュラーの小伝が収められている。これらをもつばら《冬の旅》に焦点を絞っているのに対し、本書はミュラーの生涯全体と個々の作品との関係を説明し、時代背景にも目配りを怠らず、最終的に『冬の旅』（詩集本体の場合は『冬の旅』と表記する）の分析と解釈に収斂していく点に特徴がある。読者は本書によってヴィルヘルム・ミュラーの全体像を初めて知ることになる。本書は大変な労作であり、渡辺美奈子氏は本書の基になった論文によって2009年度に東北大学大学院文学研究科から「博士」の学位を取得している。

ヴィルヘルム・ミュラーが生きたのは、ナポレオンによるドイツ支配とそれに対抗する解放戦争、そしてナポレオン以後の保守反動の時代であった。ミュラーは愛国的な人物としてこれらの時代と積極的に関わっていく。そこで得た経験の一つひとつが創作の中に取り込まれ、さまざまなモチーフを形成し、それらが象徴性を獲得しながら最盛期の『冬の旅』に流れ込んでいく。本書ではその様子が日記や書簡といった一

次資料を駆使して実証的に示されており、ミュラーの生涯と作品を一体のものとして捉えるのが本書の最大の特徴となっている。

ただし、ミュラーの生涯を叙述するといってもそう簡単な話ではない。特に幼少年期については一次資料が乏しいため、個々の作品の中から伝記的事実の痕跡を丁寧に拾い上げて、失われた連環^{ミッシング・リンク}を復元していくことになる。この地道な作業は後の作品の解釈に生きてくる。

例えば、幼少年期のミュラーは仕立て職人の息子として手工業者の生活をつぶさに観察していたと想像され、このことが後に『美しき水車小屋の娘』や『冬の旅』の成立に大きく関わってくる。前者の主人公は言うまでもなく粉挽きの見習い職人であるが、後者の主人公は職業や素性も不確かな若者であると一般的には受け取られている。しかし、渡辺氏は、両作品はミュラーの生涯と深く関わっており、それぞれの主人公にはミュラー自身の姿が色濃く投影されているため、両主人公は同一人物化していると捉える。それゆえ『冬の旅』の主人公は一義的に遍歴職人であると解釈される。現実の遍歴職人は親方の娘が寡婦と結婚することによって安定した地位と安住の地を見出そうとするものであるが、失恋とともにその夢が破れた主人公は、絶望し、寄り添わない存在として世界を彷徨うことになる。それゆえ、歌曲集第5曲の「リンデの樹」で職人の証しである帽子を失った若者は、職人の世界からも市民社会からも拒絶されるアウトサイダーであると明確に規定されるわけである。

『冬の旅』はミュラーが結婚し幸福だった時期に書かれたため、作品を詩人の実体験とは切り離して解釈することがこれまでは多かったそうだが、渡辺氏はこれに異を唱えて、新たな解釈を提示する。

ミュラーの詩人としての出発はベルリン大学の学生時代のことであった。19世紀前半のプロイセンはウィーン体制下であり、保守反動的な重苦しい雰囲気の中、自由主義運動が高まりを見せるが、それもやがて挫折と幻滅に終わる。これが愛国的な自由主義者であったミュラーの詩作に隠喩として反映している。『冬の旅』の「冬」は陰鬱で希望の光が見えないまさにこの時代の隠喩であるという。これを基調としてこれらにミュラー自身の個人的な体験が取り込まれる。すなわち、解放戦争で赴いたブリュッセルでの不幸な恋愛体験と失意の単独帰還、ベルリンにおけるルイーゼ・ヘンゼルとの恋と失恋が、『美しき水車小屋の娘』や『冬の旅』の主人公の境遇と重なるというわけである。

『美しき水車小屋の娘』は1817年から18年にかけてのローマ旅行を挟むようにして作られており、ミュラーはこの旅行を経て社会批判・政治批判を強めていくという。そして『冬の旅』が書かれたのはギリシャ独立戦争が戦われていた時期であった。

ミュラーは少年時代に他国による侵略と支配の苛酷さを経験していたため、ギリシャ独立戦争を強く支持した。それゆえ彼はギリシャの人々に寄せる共感や連帯の気持ちを当然のように『冬の旅』にも投影しているという。主人公が抱く疎外感、苦しみや諦念は、神聖同盟によってギリシャ独立戦争に不干渉の態度を取るヨーロッパ諸国に対して、多くの若者が抱いていた感情のまたとない表現となっているというのである。

本書の大きな特色の一つは、多くの詩が韻律の面から精緻に分析されていることであろう。これによって、ミュラーがシューベルトへの詩の提供者であるばかりでなく、古典ギリシャに始まるヨーロッパ詩やドイツ詩の長い伝統に連なる一人の詩人であることも浮かび上がってくる。

ミュラーはベルリン大学で古典文献学を専攻し、古代ギリシャ語、ラテン語、中世ドイツ語を始めとして様々な言語や文学に精通していた。彼が詩作をするときには、この豊かな学識が大きくものを言った。さまざまな詩形だけでなく、ヨーロッパ詩の伝統に連綿と受け継がれてきたモチーフやイメージ群がミュラーの作品を支えている。『冬の旅』の若者の回想において葉ずれの音とともに魅力的にささやきかけてくるリンデの樹は、永遠の安らぎへ若者をいざなおうとする「死」の象徴であるという。それは中世のドイツ詩において、リンデの樹が「愛」や「性愛」の象徴であるだけでなく、「死」の象徴としても表象されていることをミュラーが知っていたからだという。そして葉ずれのざわざわという音は『美しき水車小屋の娘』において若者を死へと誘う小川のざわめきの遠い反響だと解釈される。

本書においてはミュラーが同時代の詩人たちから大きな影響を受けていたことも指摘されている。「水車小屋の娘」というモチーフが当時広く流行していたことや、ウーラントの詩に『冬の旅』と共通するモチーフが現れることなど、ミュラー独自の詩の世界だと思っていたものが、見方によっては同時代の詩人たちとの共作あるいは競作であった面があるという事実には、私は虚を衝かれる思いがした。

本書で最もスリリングなのは、終章の「ミュラーとシューベルト」であろう。この章では文学と音楽のコラボレーションの実態が明らかにされている。すなわちミュラーの詩とシューベルトの音楽のそれぞれの主張がどのようにぶつかり合い融合して、『冬の旅』という連作歌曲集が成立したのかが、詩の韻律や楽曲の分析を交え説得力をもって解説されているのである。ここは音楽と文学の両分野を専攻した著者の強みである。実際の演奏においても示唆するところが多いだろう。

本書によって、ヴィルヘルム・ミュラーがさまざまな分野で幅広く文筆活動を行った

第一級の知識人であったこと、彼の生涯と彼の作品との関わり方もよくわかった。そして彼の作品が詩の伝統を受け継ぎ、当時の社会情勢や時代批判を取り込んで重層的に出来上っていることもわかった。私はこれらの議論を辿るうち、ミュラーは良くも悪しくも19世紀前半のドイツという時代と場所が産んだ詩人であることを実感するに至った。その上で、改めて思う。ミュラー作品の独創性、現代につながる芸術性とは一体何なのだろうか。

本書では、ハイネがミュラーの詩を高く評価し、ミュラーを我が師のように尊敬していたという事実も紹介されている。確かにミュラーの詩は平易な言葉で書かれ、民謡に通じる良い意味での民衆性を持っており、ハイネが自分の詩の手本と見なしたことも十分に頷ける。しかしながら、純情で生真面目で、時に感傷に陥りがちなミュラーの詩を、素朴に見えて実は複雑な諧謔に富んだハイネの詩と同列に論じることには躊躇いが残る。

個々の作品の背景を知らずに、またシューベルトの曲を知らずに、純粹にミュラーのテキストと向き合った時、それでも胸に迫ってくるものがあるだろうか。本書の論証は「二流どころ」というミュラー評価の見直しを迫るところまで行けただろうか。この点にやや物足りなさを感じた。今後は、ミュラー作品の芸術性をさらに吟味する研究が俟たれるだろう。

本書がミュラーの代表作を数多く取り上げ、また先行研究にも目配りが行き届いていて、終始冷静に論を進めている点は高く評価できるが、全体的に単調でいささかメリハリに欠ける印象を受けた。詩の引用部分だけでももう少し詩的な翻訳に挑戦してみてもよかったのではないだろうか。そうすればミュラー作品の印象も大分違ったはずである。

(渡辺美奈子著『ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品——「冬の旅」を中心に』東北大学出版会)